

書評

「原発ごみ」はどこへ

著者：徳山 明，鳥井 弘之，
帆足 養右，吉村 秀實

発行：電力新報社

定価：1,000円（本体価格）

評者：小山 清（大阪市立工業研究所）

現在、生活を支える代表的な電気エネルギーは原子力発電に頼っているといても過言ではないと考えられる。しかし、原子力発電に限ったことではないが、便利なところだけをつまみ食いして、厄介なものは他人任せで知らん顔というような都合主義が許されないことは当然のことである。

この書は放射性廃棄物の後処理を考え、理解を深めるのに有益である。一般生活から廃棄されるごみ問題については、Not In My Back Yard（自分の住居の近くにはごみ処理場はいらないという身勝手な言い分）

が全世界に共通するものである。高レベル放射性廃棄物の問題は、専門の研究者の間で技術的な問題として研究され、成果は公表されてきたが、一般にはほとんど知られていないのが現状である。原子力の技術は専門性を有する事柄だけに、表面上の賛成・反対を議論するのは問題であろう。そこで、放射性廃棄物処理における、地層処分とは何か、どのような問題が含まれているのか、などの疑問点について述べられている。高レベル放射性廃棄物とはなにか、どのようにして発生し量的にはどれくらいなのか、安全に処分することができるか、地層処分以外の選択はないのか、ということを中心として記述されている。失礼かと思われるが、原子力へのかかわりについては、経験や立場の異なる著者らが、本書の約1/3のページを使用して、著者個人の見解を掲載されている。この部分だけでもたいへん興味深く読ませていただいたが、全体としてもとくに難しい専門用語などの使用が極力避けられていて、専門の方でなくとも読み進めるのに問題もなく、本書の目的とされている内容が理解できる。

